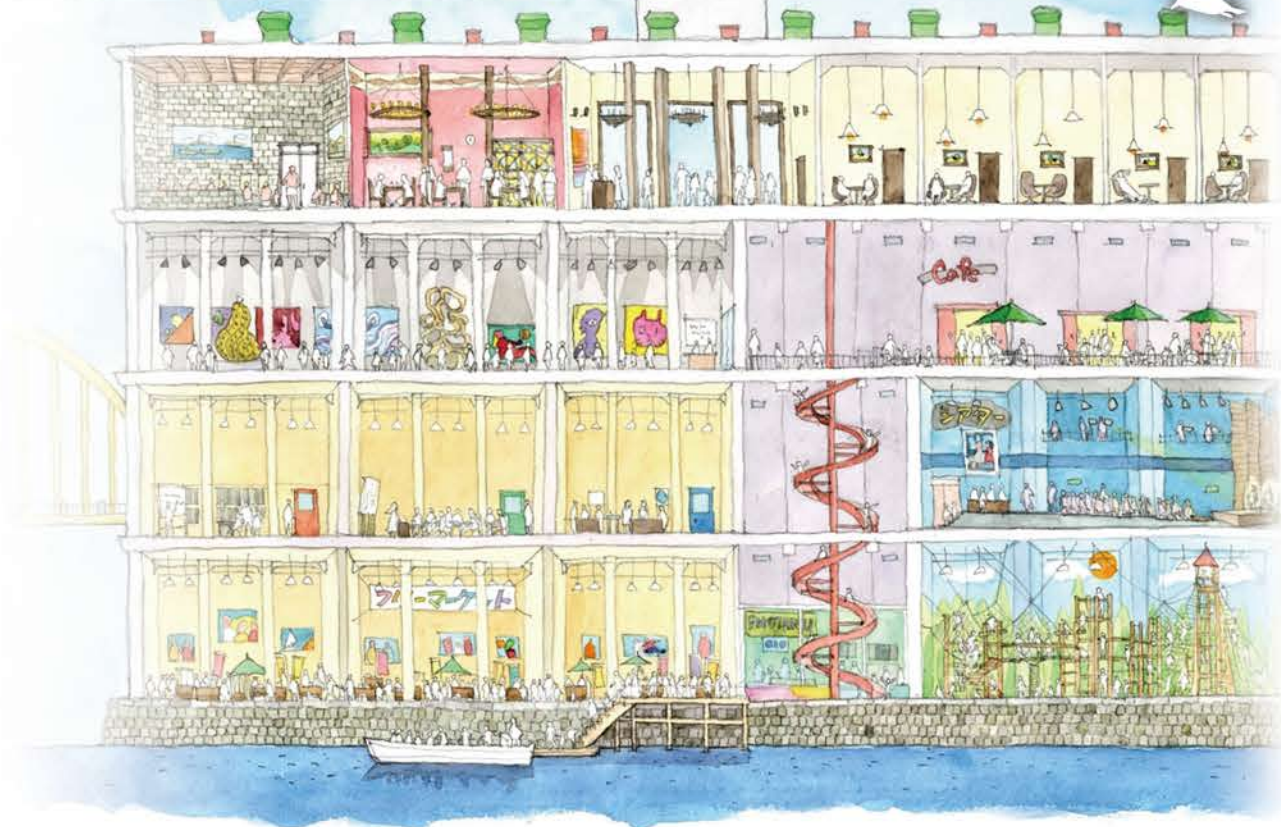
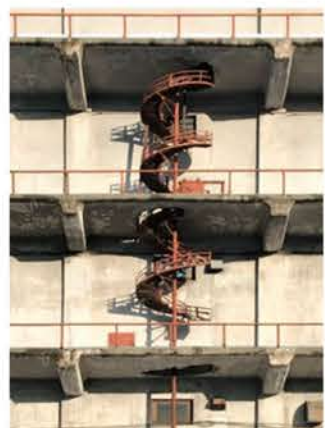


「これまでの100年」から「これからの100年」へ 北海製罐株式会社小樽工場第3倉庫



第3倉庫内部



スパイラルシュート



エレベーター



第3倉庫は、近代の鉄筋コンクリート造の中でも、埋立地に建設

文化財としての価値



オープン勉強会

(株)の空缶、缶詰類の保管を目的に、運河建設のために造成した埋立地に、大正13(1924)年に建設されました。
鉄筋コンクリート造4階建てで、全長は約100m、奥行は手宮側の北面が約20m、札幌側の南面が15m、各階は5つの収納室(倉庫)に区分されています。
荷物を運搬するためのエレベーターとスパイラルシュートや階段を運河側の外壁にまとめて配置し、室内に広い収納空間を確保した合理的な構造となっています。

もうすぐ築100年を迎える第3倉庫は、建築物としての価値のみならず、小樽の歴史や文化、景観、まちづくりなど様々な面において重要な役割を果たしてきました。
小樽運河が完成した大正12(1923)年の翌年に建てられており、運河の竣工当初に建てられた工場群の一つとして、運河とともに歴史を刻んでいます。

小樽出身の映画監督、小林正樹がメガホンを取った「人間の條件」(昭和34(1959)年公開)や小樽ゆかりのプロレタリア作家、小林多喜二の小説「工場細胞」に第3倉庫が登場します。
絵画では、運河保存運動の父と言われる藤森茂男氏が10作品で運河沿いの倉庫群とともに第3倉庫を描いている他、市立小樽美術館でも第3倉庫を描いた4人の作品を所蔵しています。
また、市内のタウン誌「月刊おたる」でも、創刊以来、表紙絵や写真、寄稿文など多くの号で取り上げられています。
さらには、大正から昭和にかけて発行された観光絵葉書にも多く見受けられます。

市民の高い関心

第3倉庫解体報道後、いち早く市内の若者グループが第3倉庫の保全・活用を考える活動を始めたほか、本ミーティングが実施した第3倉庫の見学会では、定員を大きく上回る申し込みがあり、一般市民を対象にしたオープン勉強会でも参加者の8割を超える方が第3倉庫について自身の考えをアンケートに示すなど、高い関心が寄せられました。

第3倉庫活用ミーティングは、9月27日、小樽市役所において最終報告会を行い、迫小樽市長に対して、提言書「北海製罐株式会社小樽工場第3倉庫の保全・活用に向けて」を提出しました。

第3倉庫活用ミーティングでは、本年1月に発足以降、第3倉庫の保全・活用に向けて、市民の皆様から様々なご意見をいただき、コア会議を中心に土地の用途規制や文化財登録制度など、幅広い分野で協議を続け、保全・活用の方向性を提言として取りまとめましたので、概要をご報告します。



迫小樽市長 駒木定正座長

ミーティング発足までの経緯

昨年7月、北海製罐株式会社から小樽市に対し、小樽工場第3倉庫の解体検討の話があり、9月には、経営上の理由から令和2年度中の解体方針が示され、こうした動きが新聞紙上で報道されると、広く市民の関心を集めました。

その後、10月に、迫市長から、北海製罐株式会社に対し、保存・活用を考えるための時間的な猶予を申し入れ、1年間解体が猶予されることになりました。

運河とともに歴史を刻み、小樽の歴史的遺産である第3倉庫の保全・活用は、行政だけで解決できる問題ではなく、小樽全体で考えていく必要があるという市の要請に応え、小樽商工会議所と小樽観光協会が主体となり、建築や文化財の専門家など12名のメンバーによる民間組織「第3倉庫活用ミーティング」(駒木定正座長)が発足しました。

第3倉庫とは

日魯漁業株式の全額出資で大正10(1921)年に小樽で創立された北海製罐倉庫株式会社(後に北海製罐